ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　後日談３月曜日

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18728713

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 律霊

元ヤクザの律と一度失踪した師匠との後日談です。律が風俗で遊んでいた匂わせ、また暴力表現があります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

詐欺師のスティグマ　後日談３　月曜日

依頼先に行く時は、いつも緊張する。
強敵なんてそうそういない。そう分かっていても……僕で太刀打ちできるのだろうか。……兄さんでないと駄目なんじゃないだろうか。そんなことを思ってしまう。
そして、僕はあの人に「やっぱりモブじゃないと駄目だな」と思われてしまうことが……何より恐ろしい。
僕だって、と思うたびに。
僕は兄さんの強大な超能力に圧倒されてきた。
僕は兄さんの劣化版でしかなくて。
あの人の側には、結局１番兄さんがふさわしい。
でも。
今日は月曜日。
あの人が……霊幻さんが、僕のものになる日だ。
「いけそうか、律くん」
古い日本家屋で曰く付きのツボに意識を集中する。強力な呪いがかかっているけど、敵ではない。ほっとする。
「すぐ済みます」
力を発動させて呪いを解除していく。僕があの人の役に立っている。その実感がゾクゾクと背筋を痺れさせる。
そう。
兄さんでなくたっていいんだ。
「もしまた何か起こった時には、こちらの連絡先に──」
霊幻さんが依頼人と話している。
「先生、このお怪我はどうされたのですか」
依頼人の中年男性が霊幻さんの手をうやうやしく取って、
すり、と手を擦り合わせた。
「いてててててっ！」
反射的に中年男性の手をひねり上げる。
「キサマ、何、ヒトのオンナにコナかけてるんだ」
喉からケモノみたいな声が漏れる。

「律くん、やりすぎだ！」
霊幻さんの声にハッと正気に戻る。
いけない。
消したはずの『ヤクザの律』が顔を出してしまった。
「大変失礼いたしました……私の方から良く言い聞かせておきますので、どうぞご容赦を」
依頼人は手をさすりながらビクビクと僕の顔色を伺う。
「美人局……？」
「違いますからお客様！これ割引き券です！！」
霊幻さんがクーポンを無理矢理依頼人に握らせて現場を後にする。
自分から手を出したくせにフテェ野郎だった。
「律くん、俺がちょっと手を触られたくらいであんなことやっちゃ駄目だ」
「ちょっとじゃなかったですよ、あからさまにセクハラでした、あれは」
「……客商売なんだから。少しは目をつぶってだな……」
「だいぶ譲歩してますよ、僕は」
はぁ、と霊幻さんがため息をつく。
「……でも、律くんは俺のために怒ってくれたんだもんな。そこはありがとな」
困ったように、でも感謝を込めて美しく微笑うヒト。
──僕のものだ。
喜びが全身を駆け巡る。突然霊幻さんを抱きしめた。
「わぷっ、どうしたんだ、律くん」
今だけは。兄さんを差し置いて、僕がこの人のいちばん。
「……よしよし」
抱きしめ返してくれた霊幻さんが優しく僕の背を撫でてくれる。心地よい、が……。
「元気になりそうなのでもういいです」
そう言って僕はパッと手を離した。
霊幻さんは微妙な顔をしていた。

※

仕事が終わって、呼んでおいたタクシーに霊幻さんをエスコートする。
「今日はスーツ取りに行きますから」
タクシーを銀座のポールスミスに回す。
「こんな無駄遣いしちゃ駄目だ」
真っ青になった霊幻さんに嗜められる。お金なら余ってるんだから、気にしなくていいのに……。
「大学に行きなおすんだろう？学費を取っておかないと」
ほわ、と気持ちが暖かくなる。この人の真心に触れる度に、この世で一つしかない宝石に素手で触っていることを思い出す。
「それぐらいはとってあります」
霊幻さんに言えない仕事で貯めたお金は膨大だ。調味市の予算ぐらいはある。少しぐらいの贅沢は問題無い。
「つきましたよ。ほら、早く降りて」
もたもたする霊幻さんの手を取って店舗に入る。
左右のドアマンがうやうやしくドアを開ける。
「お待ちしておりました、影山様、新隆様」
仕立て屋が頭の中の顧客名簿を思い出しながら最敬礼をする。
受け取り表を書く時に「霊幻」を二重線で消して「影山」と書き直したのを覚えていて、独特な挨拶になっていた。
「こちらでございます」
グレーのスーツを霊幻さんが受け取る。
「着てください」
フィッティングルームに霊幻さんが消える。しばらくして現れた好男子に口角がゆるむ。
すらっとしたイギリススタイルの仕立ては、思っていた通り霊幻さんによく似合う。細くしまった腰、形の良い脚を適度に意識させるスラックス。
「これで僕の隣を歩いても見劣りしないんじゃないですか？」
霊幻さんが苦笑する。
自分で言うのもなんだが、僕は目立つ容姿をしている。だからそれなりのスーツを着て歩いていると、霊幻さんの、その……うさんく

ささが、目立ってしまうのだ。質の良いレストランに連れて行っても、霊幻さんだけ止められたりすることもあって、歯痒い思いをしていた。
でもこのスーツなら大丈夫だ。ヤクザのお偉いさんぐらいにはハクがついて見えるし、生来の霊幻さんの品の良さが滲み出てて整って見える。
「これ着たまま行きます」
ショッパーに着てきたスーツを入れて貰いながら、霊幻さんをまたタクシーに連れて行く。
「六本木のリッツ・カールトンへ」
またのタクシーでの移動に霊幻さんは微妙な顔をする。
……そもそもまだ手足が治りきっていないのだから、素直に甘えればいいのに。こんな時は年下なのが悔しくなる。
ホテルについたら、最上階のレストランに向かう。
「影山です」
心得たコンシェルジュに先導されながら、豪奢なフレンチレストランに面食らう霊幻さんの手を取って、夜景が一際綺麗な窓際の席にエスコートする。
「す、すごいところでメシ食うんだな……」
「いつもってわけじゃないです」
昔、商売女にねだられて連れてきたことがある。それで「オンナ受けがいいんだな、ここ」って思ったのを覚えていた。だから気に入った商売女はたまにここに連れてきてやった。……そいつらが僕の超能力を見て、怯えて逃げ出して次々入れ替わったのはちょっとした黒歴史だ。
でも。
高いレストランに冷や汗をかいて緊張する霊幻さんを見て、失敗したかな、と思う。
霊幻さんは商売女じゃない。今までの経験は通用しない。
結局、組で「経験」したことって、何だったんだろうな。
コレを渡すタイミングすら、分からない。
ポケットの中で小さなビロードみたいな質感の箱を握る。
「め、めちゃくちゃ美味いけど、めちゃくちゃ緊張するな」

いつも通り口の周りを汚しながら食事をする霊幻さんに少し気が抜ける。
「もう少し綺麗に食べられないんですか」
「……すまん」
「もう諦めてますけどね」
「そんなところも可愛い」ただそれだけのセリフが、出掛かって喉で潰れる。
どうも、この人には素直にはなれない。商売女にはさらりと言えたリップサービスが、この人には渡せない。
……そうか。お世辞じゃなくて、本音だから。恥ずかしくて言えないんだ。
それが分かったら余計に恥ずかしくなってきた。
経験人数だけは誇れるほどあるくせに。
僕は今、初めて恋をしている。
「……」
「……」
食事が終わって、気まずい沈黙の中、ただ２人でシャンパンを舐めている。
「……律くん、そろそろ」
「左手を出してください」
ついぶっきらぼうになる。
顔が不機嫌になってくるのが分かる。ああ、僕ってやつは、もう。
「こういうのでもないと、体面が悪いですから。……なりゆきとはいえ、僕とあなたはパ、パートナーなんですから」
ああつまった、恥ずかしい。
ブルガリのペアリングの箱を取り出す。本気すぎて恥ずかしいけれど、これぱっかりは嘘をつけなかった。
これが僕の愛の証だ。きっと霊幻さんの男らしい手に似合うと思った、ゴールドの５０万の指輪。安いかな、とも思ったけど、あまりに高価なものを贈って日常使いしてもらえないのも嫌だったので、コレにした。
「手をこっちに」
くそっ、手が震える。情けない。

なんとか左手の薬指にはめた。
「こんな高価なもの……いいのか？」
「安物ですよ。もっとも、あなたの稼ぎじゃ買えないものなのは確かですが」
「はは……」
苦笑する霊幻さんとしばし見つめ合う。
「……はやく、はめてくださいよ」
「あっそうか、こっちは俺が嵌めるんだな」
リングケースから僕用の指輪を取って、霊幻さんが僕の左手の薬指にはめる。
「俺でごめんな。気を使わせて」
「いいですよ別に」
たまに見せる、この人のこういう謙虚なところは悪くない。
年下の色男と重婚してる後ろめたさはたまには感じて欲しいものだし。
……やめよう。今は僕のものだ。それだけを考えよう。
「良ければお写真をお撮り致しますが」
「い、いいです」
店員が寄ってきたのを断る。
「ご馳走様でした」
慌てて席を立つ。キラリと霊幻さんの指輪のダイヤモンドが光って嬉しくなる。やっと、僕の指輪がはまった。兄さんやエクボの指輪ばかりがその指にあるのには悔しい思いをしていた。僕だって霊幻さんの夫なのに、それを証明するものが無い、というのは思っていたよりもキツいものだった。
「霊幻さん。……好きです」
ホテルのエレベーターの中で口が滑る。違う、あふれた。
「俺も律くんのこと好きだよ」
愛おしさがこぼれるような声でそう言われて、たまらなくなる。
「れいげんさん、」
思わず肩を掴んだ瞬間ドアが開いて、慌てて離す。くそっ、早く部屋に行きたい。
イライラしながら部屋について。

ドアを閉めたら、有無を言わさず霊幻さんの唇をふさぐ。
「ン……」
柔らかく唇を擦り合わせながら、くちゅくちゅと舌を絡め合わせる。
目を閉じた霊幻さんのまつ毛が震えているのが妙に印象的で。
霊幻さんの唾液を舌ごと啜り上げる。
「あっ……」
ひくん、と霊幻さんが震えた。気持ちいいのだろうか。これぐらいの愛撫で可愛らしいことだ。
ぴちゃぴちゃと水音を響かせながらするりとスーツを脱がせていく。
「き、今日、スる……？」
「もちろんでしょう」
自分の番が来るまでずっと待っていたのだ。
「じゃあ、準備するから……」
ぐい、と密着した身体を引き剥がす霊幻さんにムッとしてしまう。
離れた体温が物足りない。
「男はこれだから……」
「めんどくさくてごめんな」
「ホントですよ。早くしてくださいね」
タバコに火をつけてトイレで洗浄する霊幻さんを待つ。
「え、待ってたのか？先に風呂入ってたらよかったのに」
「背中ぐらい流してくださいよ」
「……っ、そうだな」
吸いかけのタバコを灰皿でもみ消しながら立ち上がる。
霊幻さんのスーツを脱がしてハンガーにかけていく。
霊幻さんも僕のスーツのボタンに手をかけてくれる。
……脱がし合うのも悪くない。商売女の時は、化粧がつくのが嫌でスーツには触らせなかったけれど、霊幻さんだと気にならない。香水の臭いも化粧の臭いもしないこの人は、どこもかしこも触れたくなる。
下着姿になってバスルームに向かう。
「足、上げて」

ごくりと喉が鳴る。下着を取り去って色の薄い性器を見る度にくらくらする。おかしい。女の性器を見てもこんなことにはならなかった。
「……恥ずかしいから、あんま見るなよ」
恥じらう霊幻さんに余計に興奮が増す。
「も、先に入ってるからな」
バスルームに逃げる霊幻さんを慌てて下着を脱いで追いかける。
先にシャワーを浴び始めていた霊幻さんを思わずじっくり眺める。
色が淡い霊幻さんを水滴がキラキラといろどって。
水の流れが傷口や身体を這うのを目で追ってしまう。
女神のようだ。
そんなことを思ってしまった自分に苦笑してしまう。
嗚呼、もっと早くにこの人が好きだと気が付いていたら、もしかしたら、この人は僕の、僕だけのものだったかもしれないのに。
想いにも気付かせずに、失踪したこの人が憎い。
「ひゃっ」
すべらかな背中に触れると、目を閉じていた霊幻さんが跳ねる。
「な、なんだよ……びっくりするだろ」
「背中流してくれるんですよね？」
ボディーソープを霊幻さんの身体に塗りたくる。
「ほら、霊幻さんも」
「……っ、恥ずかしい、って、こういうの」
愛撫した身体がシャワーの熱だけじゃない朱に染まっている。
興奮がぐぁっと上がってくる。
逃げ腰になった霊幻さんを抱き寄せて口付けながら、にちゅにちゅと身体を絡め合わせる。
「……っは、ぁ……」
溢れる甘やかな声がたまらない。
「ぁ！」
股間同士を擦り合わせるとびくんと震えて霊幻さんが軽く僕を突き放した。
「風呂、あんまり汚しちゃいけないだろ……も、出ようぜ」
高い金払ってるんだから、そんなこと気にしなくていいのに。

でも、耳まで赤くなった霊幻さんの痴態に免じて、言うことをきいてやることにした。
「律くん……電気消してくれよ……」
手足の手当てをした霊幻さんにそんなことを言われてイラっとする。
「え、嫌ですけど。わがままばっかり言わないでくださいよ」
せっかくならエロい霊幻さんをじっくり眺めたい。
「……っ、分かった……」
霊幻さんが目を伏せて羞恥に耐える。
たまらない。
全部見せて欲しい。
「霊幻さん」
「……なんだよ」
裸の少し投げやりな霊幻さんをベッドにそっと押し倒しながら声をかける。
「興奮してますか？」
「……見りゃわかんだろ」
「分かりません。ちゃんと言って」
「……興奮してるよ」
ぐぐ、と霊幻さんの兆しが大きくなった気がする。
やっぱり。
この人、自己暗示かかりやすいタイプだ。
いつもはそれを仕事に上手く使っているのだろう。でも今は、興奮する方に使ってもらおう。
押し倒した霊幻さんの頸動脈をベロリと舐め上げる。
「っひぃ」
その後、つつ、と硬くした舌で首筋を舐め下ろす。
「……っ、」
脇腹を手のひらで撫でながら、舌で鎖骨を辿り、そのまま乳首に向かう。
「……ぅ、」
霊幻さんの喉が期待に上下する。それを確認して、焦らすために周りの薄い皮膚を舌で引っ張るように舐める。

「ぁ……ぅ……」
乱れる自分を恥じて声を抑えようとする霊幻さんはクラクラするほど可愛い。
でも、そろそろ。喘いでもらおう。
「あぁっ！」
尖り始めていた乳首をベロリと舐め上げると鋭い声が上がる。
「霊幻さん、乳首気持ちいいですか？」
反対の乳首をいじりながら顔を上げて訊く。
「……っぅん、」
「ちゃんと言って」
「……ちくび、きもち、ぃいよ」
じわじわと霊幻さんの全身がピンク色に染まっていく。
「たくさん舐めてあげますから、気持ちよかったら、ちゃんと言ってくださいね」
「あっ」
片方の乳首をいじる指に霊幻さんの先走りをからめてヌルヌルといじる。
もう片方は口に含んで、硬くした舌で何度もはじく。
「律く……ちくび、きもちい……先っぽ、コリコリされるの、やば……っ、ぁ、あっ」
霊幻さんの睦言にこっちが興奮してくる。
たまらなくなってきて、一旦顔を上げて挿入の準備をはじめる。
指コンドームを着けて、アナル用のローションを指に絡める。
「……挿れんの？」
「ええ」
そろりそろりと霊幻さんの後口に小指を差し込む。こぷりと中からローションが吹き出してきてギョッとしてしまった。
「……さっき準備してきたから、もう挿れて、大丈夫だぜ」
「なんで余計なことしたんですか」
こんな、売女みたいな。
「ご、ごめん」
一つずつ暴きたかった。この人の隘路を指で広げて、イイところを探って。

……優しく、愛撫したかった。
「ぁあっ、律くん、そこ、イっちゃうから」
腹立ちまぎれに指を３本突っ込んでバラバラに動かす。
「ちゃんと言ってください」
「……っ、ぜんりつせん、グリグリ、気持ちいいから、やめて……っ、メスイキ、しんどい、からぁ……っ」
きら、と粘度の高い涙がこぼれて見惚れる。
「するなら、律くんの、がいい」
そんなことを言われて、コンドームを慌ただしく取り出して、噛み切る。
くるくると怒張にゴムを重ねて、入り口にひたりとつける。
「霊幻さん……」
少し怯えて逃げた腰をぐっと引き寄せて先端を埋める。
「んう……」
「熱い……」
僕の額から霊幻さんの腹の上に汗が落ちる。
ぐっ、ぐっと腰を進めていく度に、熱い肉壺に包み込まれていく。
「気持ちいいです……」
「あっ、あっ」
霊幻さんの足がシーツを引っ掻く。
奥まで挿入った。全身を多幸感が満たす。
ほんとうに、いまは、ぼくのものだ。
「霊幻さん、ちゃんと気持ちいいですか？痛くないですか？」
「ぁっ、いたく、ない」
ぐっぐっと馴染ませるように腰を擦り付ける。
「ほら、僕のが入ってますよ」
「……っ」
顔が茹蛸みたいになる。
「ちゃんと言って」
「律くんのが、俺の中で、うごいてる……っあ！」
「いいとこ当たりました？」
奥が気持ちいいみたいだ。
「教えてくださいよ、霊幻さん」

「奥、突かれると、やばい……っ」
「こう？」
「奥、きもちいっ、もっと、ごんごんしてぇ……っ」
髪を振り乱しながらねだる霊幻さんに、脳の血管が何本が切れた気がする。
「奥ぅ、ぐりぐり、イくっ……大きいの、くるっ……りつくんっ」
泣きながら僕をねだる愛しい人を抱きしめながら腰をすりつける。
「あぁ……っ！」
ぎゅうと抱きしめ返してくる霊幻さんに涙が出そうになる。
イった霊幻さんの締め付けに逆らわず、僕も絶頂を楽しむ。
「律くん、気持ちよかったか……？」
霊幻さんが絆創膏で僕の前髪をかき上げてくれる。
「ええ」
口付けようとした僕に。
「良かった。これからも風俗がわりに使ってくれていいからな」
残酷に霊幻さんは笑った。
「律くんはカッコいいからな、きっとすぐ可愛い彼女ができるよ。それまでのツナギは任せてくれ」
僕の、恋、が。
きしみをたてる。
「霊幻さん。愛しています」
それは水に溺れかけて出た空気のようで。
「いいよ、義務感で言わなくても。そんなの言わなくても、セックスするからさ」
目の前が暗くなってくる。
否定するな。否定するな。
……僕の愛を、否定するな……！
「何様のつもりだ、アンタ……！」
「かはっ……！」
指が霊幻さんの首の周りに絡みつく。
「このまま僕のモノにしてやる……！」
鼻水まで流して酸欠に苦しむ霊幻さんが。
「い、いよ……それで、律くんの、気が、済むなら……」

息も絶え絶えにそんなことを言うから。
涙が出てくる。
「律くん、しあわせに、なるんだぞ……」
霊幻さんの目が閉じていく。
ああ。
僕も、すぐ、いきます。

「律」

バチィ、と手がはじかれて。
「それは駄目だよ、律」
優しい兄の声がして、背筋が凍る。
嗚呼。
結局僕は、愛さえ信じてもらえず。

兄には、敵わない。

月曜日は絶望日。

続